



**転生前のチュートリアルで
異世界最強になりました。6
準備し過ぎて第二の人生は
イージーモードです!**

ALPHAPOLIS

小川悟
Ogawa Satoru

CONTENTS

| | | |
|-----|-------------|-----|
| 第1章 | ゲーム的ダンジョン攻略 | 007 |
| 第2章 | 呪いの館と囚われの…… | 133 |

I became the strongest in another world
in the tutorial during my lifetime.

ジジ

人族の少女。
泣き虫で不器用だが
頑張り屋。

バルドー

ドロテアの元冒険者仲間。
しっかりしているが、
シブミキケンな趣味を持っている。

テンマ

33歳で命を落とし、
異世界に転生することになった
元ゲーマー。ゲームの知識で
この世界を楽しみ尽くす。

バルガス

A級冒険者パーティ
「妖精の守り人」の
リーダー。思慮が浅く、
思い込みが激しい。

アンナ

テンマの研修を
管理していた元女神。
神格を剥奪され、
テンマの仲間に。

ミーシャ

冒険者に憧れ、
「開拓村」を出た狐耳少女。
研修に対して
かなりストイック。

マリア

バルガスの妻。
異世界イチ胸が
大きい(テンマ調べ)。

ドロテア

国内では知らぬ者が
いない英雄。
トラブル体質なことを
反省中だが……?

登場人物紹介



第1章

ダンジョン的
攻略

I became the strongest in another world
in the tutorial during my lifetime.

第1話 妖精の寝床

俺、テンマは王都に入るための検問を待ちながら、感慨に浸っていた。だつてここに来るまで、本当に長かったのだ。

三十三歳で命を落とした俺は、十四歳の少年として、日本から異世界へと転生させられた。

とはいえ、それまでにも結構な苦労をしたんだよな。

というのも、転生者は転生前に簡単に死なないための研修を受けなくてはならないという決まりがあったのだ。

元々研修期間は三ヶ月と聞かされていたが……実際に終わったのは、なんと十五年後。俺の研修を管理していた女神のミスが原因だったらしい。しかし、その十五年は無駄ではなかった。前世のゲーム知識を活かして訓練に明け暮れていたために、ステータスが桁外

れの数値になったのだから。

ともあれ、どうにか研修が終わり、俺はテラスという名前の世界にある辺鄙な村・開拓村の付近に放り出された。

開拓村に身を寄せ、一ヶ月半くらいのおんびりした生活を送っていた俺だったが……村に住む狐獣人の美少女・ミーシャとともに、なぜか冒険者になることに。

とはいえ、各国を巡るわけでもなく、しばらくは辺境の町・ロンダで暮らしていたんだけだよな。

ロンダから出られなくなった最大の理由は、仲間が増えたことだ。

人間族と免獣人のハーフであるジジとビビ姉妹。国の中でも指折りの魔術師で、ロンダの魔術ギルドのギルマスを務めていた上に英雄とまで呼ばれるドロテアさん。そしてその姪孫でありロンダの領主であるアルベルトさんの娘のアーリン。あとはドロテアさんの元冒険者仲間、優秀だがアブナイ趣味を持つバルドーさん。そして、最近では俺の研修の設定をミスったことで神格を剥奪され、この世界にやってきた元女神のアンナも仲間になったんだよな。

もともと彼女は、正式には責任を取る意味で俺の眷属になっているわけだが。

ともあれ、俺の知識を活かした『テンマ式研修』でみんなのステータスを育成したり、はたまた遊んだり。そんなことをしているうちに、なんだかロンダに居着いてしまったっ

てわけだ。

とはいえ町に住んでいたというよりは、空間を複製出来る魔術——ディメンションエリアを用いて生成した、どこでも研修施設——D研内に建てたどこでも自宅内で暮らしていた、と言った方が実態には近い。

D研には豪華な部屋や工房、プールまであって、かなり便利なのだ。

でも、そこに入り浸って異世界を見て回らないのももったいない。

そんなわけで、俺は仲間達とともに道や中継地を作りつつ、王都を目指すことにした。

アーリンだけは、諸般の事情で別行動をしているが。

しかしその道中も、一癖も二癖もある仲間達のせいで、トラブルだらけだった。

この間だって、A級冒険者パーティ・妖精の守り人に突然襲われたわけだし。

この辺りに異変がないか調べるよう依頼されていた彼らは見慣れぬ街（俺からしたらただの中継地なのだが）が前触れもなくできたことを訝しみ、中継地の門を叩いた。

その対応に当たったのは、ピビ、ミーシャ、ドロテア、シル、ハル。

ドロテアさん達は認識障害の仮面をつけていて、かつ俺の従魔のシルバールフ・シルや、ロンダ付近のダンジョンで出会ったピクシードラゴンのハルと念話で話していた。

『魔族は魔物と会話できる』と伝説や物語上では語られている。妖精の守り人は五人を魔族と魔物の集団だと勘違いして、攻撃を仕掛けた、という話らしい。

また、妖精の守り人のリーダーのバルガスの妻であり、パーティメンバーでもあるマリアさんは石化の呪いを受けている。早く依頼を終わって帰りたいがために焦っていたことも勘違いに拍車をかけた。そして、バルガスとマリアさんともにドロテアさんの元冒険者仲間なんだとか……。

ドロテアさんが彼らを忘れていなければ……とは思ったものの、今更言っても詮ない話。結局ドロテアさんへの罰は遊び道具を没収するだけに留め、アンナにマリアさんを解呪させた上で、妖精の守り人には三ヶ月の強制労働を命じることにした。

そんなわけで、バルガス、マリアさん、ミイにタクト、ジュビロとリリアという、妖精の守り人の面々も加え、王都へ向かうことに。

それ以降も貴族のゴタゴタに巻き込まれかけるなど、色々なことがあったが……ひとまず、こうしてここまで辿り着けて、本当に良かった。

検問を終えて、王都の門を潜る。

王都には、予想より簡単に入ることができた。

妖精の守り人が護衛しているのもあるが、なんと言ってもバルドーさんの存在は大きかった。

彼はかなりのやり手で、各所とパイプがあるため、信用されているのだ。バルドーさん

の存在に気付いた門番が、すぐに上司を呼びに行き、ろくな確認もなく通してくれるほどには。

タクトとジュピロが操る馬車に乗って、『妖精の寢床』へ向かう。

妖精の寢床は、マリアさんの妹さんが営む宿である。

とはいえ実質的なオーナーはマリアさんで、昔から彼女と付き合いのある人だけが宿泊するような感じの、極めて私的な運用がなされている。

だからしばらくは妖精の寢床を貸し切るような形で、宿泊させてもらうことになった。

ちなみに、馬を御しているタクトとジュピロの顔色は悪い。

鞍に厳しい祖母のメアリさんに会うのを恐れているのだろう。

俺は王都の街並みを眺めて、素直に感動していた。

人通りの多さがすごく、初めて見る種類の獣人もいる。

商店や屋台も結構数があって、見たことのない食べ物や商品がずらりと並んでいた。

横を見ると、俺と同じく王都を初めて訪れたジジに、ピー、ミーシャも目の前の光景に目を輝かせている。

かつて、マリアさんを治療する目的やバルドーさんを送る目的で、空を飛んで何度か王都を訪れていた。

ただ、そのときは目立たないように路地裏や建物の屋上に降りただけで、ゆったり街並

みを見る余裕なんてなかったのだ。

うーん、王都を見て回るだけで何日必要かなあ？

馬車を降り、歩いてじっくりと見て回りたいが、ひとまずは妖精の寢床へ向かうのが先決だと自分に言い聞かせて我慢する。

そして、視線を馬車の前方へと移す。

馬車の前を、バルガスとシルが先導している。王都でも有名なバルガスが連れて歩けば、珍しい上に強いシルバールフがいても騒がれすぎないだろうという判断だ。

その目論見通り、シルを怖がる人はいなかった。

どころか、真つ白でモフモフの毛並みには、街行く人の好意的な目が向けられている。……まるで自分の従魔のように自慢気にシルを連れて歩くバルガスにちよつとムカつく

が、我慢我慢。

馬車は大通りを抜け、小道に入り——気付くと、妖精の寢床の前に到着していた。

すぐに馬車を降りて、妖精の寢床の中へ。

すると、メアリさんが満面の笑みで出迎えてくれた。

「ドロテア様、バルドー様、そしてテンマ様、ようこそおいでくださいました。精一杯のおもてなしをさせていただきます」

「うむ、メアリにも久しぶりに会うのお。しばらく厄介になるのじゃー！」

ドロテアさんは、メアリさんを昔から知っているみたいだ。

マリアさんやバルガスとも古い付き合いだと考えると、当然と言えば当然か。

食堂へ移動し、部屋の準備を整うのを待つ。

マリアさんとバルドーさんがメアリさんと相談して、部屋割りを決めてくれるらしいのだ。

少しして、マリアさんがやってきた。

「部屋の割り振りが決まりました」

一階は、二人部屋にミーシャとリリア。マリアさんとミイは先日までマリアさんが療養していた部屋。バルガスは一人部屋、という割り振りだった。

それ以外の面々は二階の部屋が適当に割り当てられているみたいだ。

マリアさんと同部屋になりたいバルガスは懸命に抗議していたが、受け入れられるわけもない。

あ、ちなみにバルドーさんは妖精の寝床で寝泊まりしないらしい。

朝夕の食事は一緒に食べるが、まだ色々調整をつけねばならぬことがあるため、日中は各地を忙しく飛び回ることになるんだとか。

マリアさんの話では、バルドーさんは少し前まで王都にずっといたのだが、どこに住んでいるのかは誰も知らないという話だ。

さて、そんなふうに部屋割りをしてもらったものの、俺らは基本的にはどこでも自宅で過ごすことになる。

今回もいつものように、D研の入り口を配置した部屋には許可した者のみが入り出きるようにする予定だ。



翌朝、食堂で食事しながら、俺は今後の予定について切り出すことにした。

もつとも、昨晩の夕食を食べたあとにそれぞれ希望を聞いて、どうするかは決めてあるのだが。

「今後の予定を確認しておきましょうか。ドロテアさんとマリアさんは一緒に行動するんですよね？　そして、空いている時間を使ってミイの魔術の訓練をしてくれるとか」

ドロテアさんは『マリアと一緒に動くのじゃ！』の一点張りで、何をするかを詳しく話してくれなかった。

不安はあるものの、結局、問題さえ起こさなければ良いか！　と割り切った形だ。

「そうなのじゃー！」

「お姉様の面倒は任せてください」

「それはどういう意味なのじゃ!？」

ドロテアさんはぎゃあぎゃあ言っているが、まあ、マリアさんがしつかりしているからどうか手綱たづなを握にぎってくれることだろう。

そして――

「ハルも、その二人と行動してくれ」

ハルはマリアさんに懐なついているというか、餌え付けされているというか……居心地いじこちが良さそうにしているの、二人に任せることにした。

……ドロテアウィルスとハルウィルスが反応して、予想外のウィルスに変異しないことを祈るばかりだな。

二人と一匹が領うけいてくれたのを見て、俺は話を進める。

「ミーシャ、リリアとタクト、ジュビロの四人は臨時で冒険者パーティ『狐の守り人』フォックスガードを結成して、王都周辺のダンジョンに行く。バルガスは彼らの監督かんとくと護衛……ってことで良いよな?」

ミーシャはまだ冒険者ランクこそ低いが、実力はそれなりにある。

足りない経験たを積たませるために、彼らと一緒に冒険者活動をさせようって話だ。

しばらくは日帰りで探索たんさくできる範囲はんいで、ミーシャのレベルと冒険者ランクを上げてもらって、特に問題がなさそうだったら泊まりで探索をさせることも考えている。

決して面倒だから任せたのではない……ごめんなさい。

「待てよ、俺は納得なつできねえぞ!」

バルガスが文句もんぐを言ってきた。

「悪いが、妖精の守り人の処遇を決める裁判で、俺のために強制労働をしてもらうことは決まったはずだ! 今更文句を言うのは、男らしくないぞ!」

「違う! 役割やくえいに関しては問題ねえ。しかし、これはなんだ!? そして、こいつらはなんで文句も言わずに普通に受け入れているんだよ!」

バルガスの右手には、俺が作った狐耳と狐尻尾しっぽが握にぎられている。

そして左手で指差した先には狐耳と狐尻尾しっぽをつけたリリアとタクト、ジュビロがいる。

三人は、自分の狐耳と狐尻尾しっぽをつけるのにモフっていた。

「パーティ名にちなんで、狐耳と狐尻尾しっぽをつけるのは当然だろう。なんだって可愛かわいいし、本人達も納得している。問題ないはずだ!」

リリア達は、俺の言葉に対して嬉うれしそうに頷うなづいている。

「別に狐の守り人だからって、狐獣人セットをつける必要はねえだろ! いや、こいつらに関しては納得しているから百歩譲ひゃく歩譲って仕方ないでしょう。でも、なんで俺の分まで用意よういされているんだよ!」

一緒に行動するわけだし、お揃そろいの方が良いかなと思って用意よういしたのだが、どうやら気

に入らないらしい。

「ちゃちゃっとつければ良いのに……面倒な男だ！」

そう思っていると、マリアさんが笑顔で言う。

「あら、私は可愛いから好きよ。ケモミミをつけたバルガスに襲われるのも、悪くないかもね」

バルガスは無言で狐耳と狐尻尾をつける。

うん、似合わないな！

そう思ったのは俺だけじゃないはずだ。

「ま、まあ！ 野性味が増したわ！ ……いや、ないわね」

マリアさんの最後の一言は小声だったのでバルガスには聞こえていなさそうだな。

現に彼は、嬉しそうに狐尻尾を撫でている。

なんだか、バルガスがちょっと気の毒になっちゃおう。

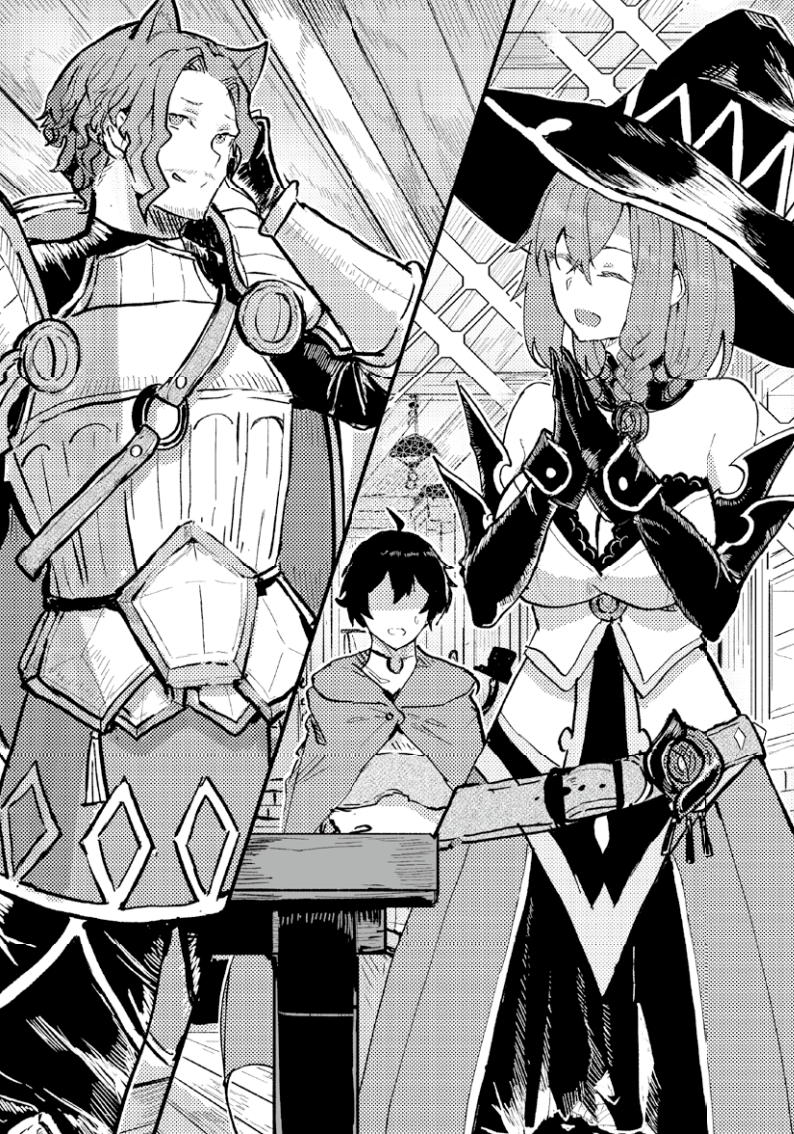
居たたまれなくなった俺は彼から視線を逸らし、ピビとミイの方を向く。

「ピビとミイには、訓練を続けてもらおう」

自分より年齢が下のピビに痛めつけられるのは、精神的にク。ピビとの訓練と聞いて、

ミイは絶望したかのような顔になった。

俺は続けて言う。



「だが、ミイにはまず、王都の案内をお願いしたい。ピビもまずは、一緒に街を巡ろうな。ジジとシルも」

「……分かりました」

ひとまず訓練を先送りにできると思ったのだろう、ミイはホッとした表情で返事してくれた。

ピビも「わーい！ 王都巡りいー」なんて言いながら、シルと一緒に楽しそうにはしゃいでいる。

ジジもわくわくした顔で頷いている。

「アンナはドロテアさんから頼まれていることがあるんですけどよ？ 相談して事に当たってください。バルドーさんは引き続きみんなのサポートと、諸々の調整をお願いします」

そして俺は最後に、一番大事なことを言う。

「それでは皆さん、くれぐれも問題を起こさないようにしてくださいね」

……この発言がフラグにならないことを、祈るばかりだ。

第2話 狐の守り人

朝食を摂ったあと、妖精の寝床を出たバルガスと狐の守り人は、まず冒険者ギルドに向かうことにした。

臨時バーティとはいえ、冒険者ギルドに登録しておいた方が何かと都合が良いだろうという話になったのだ。

ふとバルガスは、すれ違う人々が自分達を避けているような気がして、口を開く。

「なんか、周りの視線が変じゃねえか？」

（（バルガスさんが目立っているせいでよ！））

リアとタクト、ジュビロの三人は、内心でそう叫んだが、口には出さない——否、出せない。

すれ違う人達は、まったく似合わない狐獣人セットをつけているバルガスを気味悪がつて、避けている。

しかし、それを言葉にして伝えるのは、かなり残酷だと考えたのだ。

そして、同じく狐獣人セットを身に着けている、他のメンパーはどう見られているかと
言えば……。

リリアは老若男女誰からも『可愛らしいな』という好意的な目で見られていて、タクトとジューピロは様々な世代の女性から好意的——を越えて、熱を帯びた視線を注がれている。何はともあれ、冒険者ギルドの近くまでやってきた。

冒険者達は、バルガスを見てきよつとしてから、他の三人を見て顔をほころばせる。そして再度普段とは違う四人の格好を訝しみ、ココソと内緒話を始めた。

(……なんだあれは？ リリアは可愛いが……)

(もしかして新たな願掛けか?)

(タクトとジューピロは、悪くないかも！)

(あの尻尾を撫で回したいわあ！)

(バルガスさん、ついに愛に……)

他三人はともかく、バルガスは、あまりに似合っていないすぎて心配すらされてしまう始末。しかしバルガスは、自分が似合いすぎているあまり、みんなが自分をこそこそ褒めてい
るのだと勘違いしていた。

そして、自信満々に冒険者ギルドに入っていつてしまった。

そんなバルガスの背中を、リリアとタクト、ジューピロは呆れた顔で見つめる。

そして、同じことを決意するのだった。

(バルガスさんと一緒に行動するのは辛すぎる！ 早く別行動できるように頑張ろう！)

バルガスがギルドの中に入ると、それまで騒がしかったギルドが一瞬で静かになる。

しかし、バルガスは羨望の眼差しを注がれているのだと勘違いし、胸を張って受付へ。すぐさまやってきた受付嬢が、バルガスに話しかける。

「バルガスさんお久しぶりです。今日はどのような用件でしょうか？」

彼女の名は、ネフェル。王都の冒険者ギルドの受付の職員を束ねている。

この世界では魔力量が多いと、外見が老けにくくなる。ネフェルは四十三歳だが、元々冒険者をやっており、ジョブが魔術師だったために魔力量が多く、三十歳過ぎにしか見えない。彼女はいつも優しく微笑んでいるものの、その実非常に厳しい。横暴な冒険者を容赦なく得意の結界魔術で拘束するため、冒険者からは非常に恐れられている。

厳しく、やり手な彼女は、バルガスの格好を見て何かあったのかと訝しむが、ひとまずはそれを表情に出さないようにしつつ話を聞くことにする。

「おう、実は先日ゴドウィン侯爵から指名を受けて受注した依頼に失敗したんだ。その報告と、新しい冒険者パーティーの登録に来た」

ゴドウィン侯爵は『ラコリナ周辺の盗賊の討伐が遅れているから、それを手伝いつつ、ラコリナに来る予定のドロテア一行の警備をするように』と依頼を出していた。

盗賊はテンマ達があらかじめ捕縛していた上に、妖精の守り人はドロテア達に攻撃を仕掛けてしまった。

完全なる任務失敗である。

とはいえ、それを正直に話してしまえば話がこじれるわけだが、基本的に考えが今一步足りないバルガスがそんな配慮をするはずもない。

そして、ネフェルは当然、深刻な表情になる。

（任務を失敗したにしては表情が明るいわ……。もしかして狐獣人の姿をしているのは、心が壊れてしまったからってこと……？ 新しい冒険者パーティの登録っていうのも、失敗を気に病んで心機一転、再出発したいとか考えているのかしら!?!）

そんなふうには推測し、ネフェルは言う。

「バルガスさん、奥で詳しい話を聞かせてくれますか？」

「お、おう、そうだな。色々と話しておきたいこともあるから、ちようど良い」

バルガスはネフェルが露骨に不安そうな表情をしていることに戸惑いながらも、そう答えた。

ネフェルはバルガス達を特別室に案内しながら、秘かに決心を固める。

（妖精の守り人はマリアさんというまとめ役がいたから成り立っていた。でも、バルガスさんも実力者なことは確かよ。なんとか立ち直ってもらわないと!）



「よお、バルガス。元気にしていたか？」

バルガス達が特別室に通されてしばらくして、ノックもなく白髪の元気な老人が入ってきた。

部屋の隅で控えるネフェルが、彼を呼んだのだ。

まさかギルマスが出てくるまでの事態になるとは思っていなかったバルガスは、驚きのあまりに少し固まっていたが、どうにか口を開く。

「ギルマス、どうしたんだ？」

「いや、この国一番の冒険者パーティである妖精の守り人が依頼に失敗したと聞いてな。

何があったのか気になって、報告を聞きにきたただけだ」

この発言は、方便と言える。

ネフェルにバルガスの様子が変だと報告を受けて、様子を見に来たというのが、本当のところだった。

バルガスは、ギルマスの質問に答えようとして——はたと気付く。

（ここで本当のことを喋ったら、『余計なことを言うな』とテンマやマリアに怒られる可能性があるな。濁すしかねえ……）

そう結論付けて、バルガスは口を開く。

「ま、まあ……色々あったんだ。俺達が到着したとき……すでに盗賊は捕縛されていたんだ。だから依頼は失敗だって言ったんだ。不利益は発生していない」

理屈自体は通っており、『問題はないようだ』とギルマスは一瞬判断しかけたものの、思い直す。

あまりにもバルガスの歯切れが悪いため、何か隠しているのではと考えたのだ。

「悪いが、詳しく事情を話してくれるか？」

ギルマスの問いかけに、バルガスは困ってしまふ。

詳しく話すとすると、自らの勘違いについて話さなくてはいけなくなる。

評価が落ちるといいうのもあるが、シンプルに恥ずかしくてバルガスは口ごもる。

そうしてしばし沈黙が流れていたのだが、それをミーシャが打ち破った。

「バルガス、早く冒険者パーティの登録をして！」

最初、ミーシャは王都のギルマスに会えると思っていなかったため、驚いていた。

だが、話しているのを見るうちに服装は違えど開拓村の村長と大して雰囲気が変わらな

いな、と感じ始め、やがて緊張が解ける。

そして、本来の目的に立ち返った。

そもそもバルガスの失敗は自分には関係ない話であり、過去のこと。早くパーティ登録を済ませてダンジョンに行きたかったのだ。

彼女がシンプルに物事を考えるきらいがあることを知っている妖精の守り人の面々はともかく、バルガスとの関係すら知らないネフェルとギルマスは、驚愕に目を見開く。

（バルガスさん呼び捨て!? っていうかそもそもこの娘は何!? なぜ彼らと一緒にいるの?）

（ギルマスである私の質問を遮ってくる冒険者なんて、初めてだ! なんだこの娘は!）

そんな二人を他所に、バルガスはミーシャに向かって手刀を切る。

「ああ、すまん、すまん。ネフェル、悪いが、先に冒険者パーティの登録をお願いできな
いか? リリアとタクト、ジュピロの三人は新しい冒険者パーティ・狐の守り人を結成す
る。そして、パーティリーダーに、このミーシャを据えたい」

（えっ! っていうことは、妖精の守り人を解散するの!）

ネフェルは驚きのあまり、声を上げられなかった。

代わりに、ギルマスがバルガスを問い質す。

「どういうことだ! 妖精の守り人は解散するのか!」

「妖精の守り人を解散……するわけではない……はずだ」

妖精の守り人というパーティ名は、勇者とともに戦い、伝説のピクシードラゴンであるハルを守った聖騎士が由来だ。

しかし、先の騒動で妖精の守り人はハルの尻尾を切り落としてしまった。

そのことを気に病んだマリアがパーティ名を変えろと言いついて、バルガスは考え直してもらおうよう、必死に説得している最中である。

そういった事情があつて言い淀んでしまったのだが、バルガスとネフェルはパーティ解散が実際に起こりえるほどの緊急事態だと勘違いする。

「……バル——」

「バルガス！」

バルガスが詳しく話を聞こうとするのを遮って、ミーシャが声を上げた。

彼女としてはいち早くダンジョンに行きたいがために『早く！』という意図で名前を呼んだのだが、バルマスからすればバルガスが叱られているように見える。

バルガスはミーシャの気持ちも分かるので、もう一度ネフェルに頼む。

「ああ、分かったよ。ネフェル、頼むから冒険者パーティ登録を先にやってくれ！」

（まずはバルガスより立場が上の、この少女の望みを叶えなければ話が進まないということなんだな!! それなら仕方あるまい）

そう判断したバルマスは、声を上げる。

「ネフェル、登録してやれ！ その代わり、きちんと説明してもらおうぞ！ バルガス！」

その言葉を聞いて、すかさずミーシャは「登録したらすぐにダンジョンに行く！」と叫んだ。

「おいおい、それはダメだ。さすがに事情を説明してからじゃないと——」

そんなバルガスの発言を、ミーシャは「話が違う！」とぶつた切る。

ミーシャはダンジョン探索を、昨晩から楽しみにしていた。なのにバルマスはバルガスをなぜか引き止める上に、その理由も語らない。ミーシャはそれに背立ち、かつ上手く聞き出せない口下手な自分にも腹を立てていた。

一方バルガスは、そんなミーシャの気持ちをなんとなく理解していた。

昨日のミーシャの喜びようを知っていたためだ。

それに、これ以上追及されるのもあまり望ましくない。

バルガスはどうか話を早く切り上げようと、言う。

「今日、俺達は冒険者パーティ登録して、ダンジョンに行く予定なんだ。ゴドウィン侯爵の依頼の件を失敗だと言ってしまったって混乱させてしまったのは申し訳ない。だが、誰も損していないじゃないか」

「確かにそうだが、バルマスとして詳細な説明を聞く権利がある。それが終わるまで、ダ

ンジョンに行かせんぞ！」

バルガスは少し考えたあと、口を開く。

「そうか、だったらギルマスのアンタがすべての責任を取ってくれよ!？」

「分かった。責任は私が取る！」

ギルマスは事情を聞くまで引き下がれないと思い、力強く答えた。

強気なギルマスの発言を聞いて、バルガスは溜め息を吐く。

「……はあ。マリアとドロテアさん、テンマ、それとバルドーさんにも、ダンジョンへ行けなくなった理由を説明してくれるなら……まあ、良いか」

「えっ!？」

予想外の名前が出たことに、ギルマスとネフェルは驚いた。

それを横目に、バルガスはミーシャに頭を下げる。

「ミーシャ、すまん！ まさかギルマスがこんなことを言い出すとは思わなかったんだ」

「分かった……我慢する！ グスッ」

バルガスがダンジョンを優先してくれようとしたことは、ミーシャも分かっている。

どうにか折り合いをつけて、諦めることにした。

しかし、期待していただけに涙が溢れてしまう。

「あちゃー泣かしちまったよ！ なあ、テンマは怒らないよな？」

「まずいかも……」

「そうだね。テンマさんは仲間のことになると思うし」

「ドロテア様も悪いわよ。最近は大人しいけど、いつ爆発するか……」

バルガスの質問に、ジュビロ、タクト、リリアはそれぞれそう答えた。

三人の言葉を聞いてバルガスは顎に手を当て——やがて、考えることを放棄した。

「まあ、責任はギルマスが取るみたいだから、俺達は大丈夫だろ」

「……」

リリア達は不安ではあったが、かといつてこうなってしまうかどうかにもならないので黙る他ない。

しかし、ギルマスとネフェルは慌てたように声を上げる。

「待て待て！ 俺らを置き去りに話を進めるな！ どういうことだ!？ なんでドロテア様の名前が出てくる！」

「バルドーさんの名前まで！」

それからバルガスは自分達が犯した過ちや、その罰として働かされていることを包み隠さず説明した。

ギルマス達はマリアがすでに回復していることを知って喜んだが、テンマについての情報に関しては、半信半疑である。

バルドーが仕え、ドロテアがやり込められ、バルガスを素手で圧倒する人間なんてたまるか——と、どうしても思ってしまうのだ。

「ほ、本当にその場にいた魔術師は、ドロテア様だったのか？」

「はあ……元パーティ仲間の俺が見間違えるはずがないだろ！」

「でも、バルガスは忘れられていた」

すでにダンジョンを諦め、泣き止んだミーシャはジト目でバルガスに突っ込んだ。

「それこそがドロテアさん本人だって証明だろ」

そんなやり取りを横目に、ギルマスは無意識にドロテアの名前を呟っていた。

実はギルマスは、ドロテアが冒険者を始めた頃から彼女を知っていた。

何度か直接会ったこともあり、そのときの傍若無人な振る舞いを、ギルマスは今でも覚えていた。

いや、忘れることなどできなかったといった方が正確である。

（あの人に常識は通用しない！）

「ミ、ミーシャ……様はドロテア様と、ど、どのような関係ですか？」

怯えた表情でギルマスが尋ねた。

ミーシャはそう聞かれて改めて冷静に考えてみる。

（最初はすごい人だと思っていたけど……今はそうでもないかも。いつもテンマに叱られ

ているし、泣いてばかりで子供みたい）

「……出来の悪いお姉ちゃん？」

ミーシャは、戸惑いながらそう答えた。

しかし、それを聞いてギルマスは顔を青くする。

（それほどまでにドロテアさんに近い存在の少女に、私はあんな態度を取ってしまったのか！ どんな目に遭わされるんだ私は！ いや、まだ間に合うやもしれぬ。ひとまず許しを乞おう）

そうしてギルマスは、膝を折り、手のひらと頭を地面に付け——土下座した。

「申し訳ありませんでした！ 王都の冒険者ギルドはミーシャ様に最大の便宜を図ります。どうか、どうか！ ドロテア様に事を荒立てないようにお願いしてください！」

こうして冒険者パーティ・狐の守り人は『ギルマスを土下座させた』という衝撃的なエピソードとともに、誕生したのだった。

第3話 王都観光

俺、テンマはミイの案内でジジとピピ、それとシルと一緒に王都観光に出掛けることにした。宿から出ようとしたところで、ドロテアさんに声を掛けられた。

「テンマ、王都であまり問題を起こしてはダメじゃぞ！」

あんたにだけは、言われたくねえよ！

……なんていう内心の声を呑み込み、適当に手を振って答えた。

そんなことがありつつも、俺らは街へ繰り出す。

シルとピピが並んで先頭を歩き、その後ろを左からジジ、俺、ミイの順で横並びになっ
てついでいく。

「この辺はただの住宅街なので、あまり見どころはありませんね。もう少し行くと商店街
があります。そしてそこを真^ま直^すぐ抜けると、王都の中心の広場があるんです。広場には
屋台が立ち並び、珍しい物もたくさんありますから、ゆっくり見て回っていたら、一日な

んですぐさま過ぎちゃいますよ」

ミイは案内慣れしているようだ。

宿のお客さんを案内したことがあるのかもしれない。

「なるほどなあ。折角^{せかく}だし、広場をゆっくり見て回りたいな」

そう答えつつ、俺は視線を前に向ける。

そこでは、シルがピピと追いかけてくをしていた。

ピピが追いかけてくるシルを軽くあしらうように避けたり、背中に乗ったりしている。

だが、知らない人が見たら、ピピが襲われているように見えるかも……。

ミイが小声で俺に話しかけてきた。

「商店街に入ったら、ピピちゃんとシルちゃんを止めてもらえますか？」

うん、だよねえ。ここは俺がしっかり言っただけでいいよ。

なんて思っていたら、ジジが口を開く。

「ピピ、街中でそんなことをしたら、他の人に迷惑^{めいわく}が掛かるわよ！」

「はあーい」

続けて、俺はシルに言う。

「シルも街中では大人しくしているよお」

『うん、分かったあ』

ピピとシルは、ちゃんとジジと俺の言うことを聞いて、大人しく歩き始める。

「テンマさんはシルちゃんと、本当に話しているみたいですねえ」

感心したように、ミイはそう言った。

……いや、本当に話しているんだが。

ハルは魔力を多めに込めることで、念話が使えない相手にも意思を伝えられるが、シルはできない。

故に、俺や念話機能付きのチョーカーをつけているジジやピピとは話せるものの、ミイはシルの言っていることが分からないんだよな。

うーむ、ミイやミーシャ以外の狐の守り人にも魔導具を用意するかな。

あとはマリアさんにも胸元を飾るようなペンダント型の魔導具を……妄想が膨らむなあ。まあでも、バルガスには必要ないな！

それにしても最近では、魔導具より服ばかり作っているような気がする。

というのも、周りの女性陣は最初こそ着心地の良さに満足してくれていたのに、最近ではデザインに注文を付けてくることが多くなった。

その発端は、アンナである。

彼女は俺の眷属であるという立場を弁えているということなのか、頑なにメイド服以外を着ようとしない。しかし、なぜか下着のデザインや素材には注文を付けてくるのだ。

『私が創造神の眷属をしていた頃は、このようなデザインの着を身に付けていました。下着だけでも着慣れた物を身に付けていたのです』

そう言って渡されたデザイン画は、あまりにも煽情的。

受け取る際にはなんとか動揺を押し殺していたが、実際に作ってみるとあまりにも過激だったから『これをアンナが……』なんて想像して、鼻血を出してしまったんだよな。

ただ、アンナの下着のデザインは女性陣には好評で、同じような下着を頼まれるようになった。

そして、『服ももう少し遊びのある感じにしてほしい』なんて言われるようになったのである。

そういえばジジもアンナデザインの着を恥ずかしそうに注文してきたけど……ま、まさか、今それを着ているなんてことはないよね!?

そんなタイミングでジジが「あっ、商店街に入りましたよ」と声を掛けてきたので、口から心臓が跳び出そうになる。

「そ、そうかい。ゆっくり見て回ろう……」

不思議そうな顔で俺を見てる、ジジが可愛い。

思わずジジに頼まれた下着が脳裏に浮かんでしまう。

「テンマ様！ 鼻血が！」

「わ、わあー！」

すぐに思い浮かんだ下着を頭から追い出し、鼻血ハプニングに対処する。

それが一段落して、視線を横に向けると、ミイが商店のおばちゃん連中に取り囲まれ、質問攻めに遭っていた。

俺は会話の成り行きを見守ることにする。

「ミイちゃん、やはりマリアさんに何かあったのかい？」

「メアリさんが回復したと言っていたけど、違ったのかい？」

「えっ、お母さんは無事に治りましたよ。今日も出かけると言っていましたし」

ミイはなぜそんな話が広まっているのか分からないといったような様子で、戸惑っている。

「じゃあ、なんでバルガスは変な格好で歩いてたんない？」

「私は見たよ！ 獣人みたいな尻尾や耳をつけているのを。絶対に頭がおかしくなったに違いない！」

噴き出しそうになったが、どうにか堪える。

ジジも手で口を押さえているが、ミイは堪え切れずに大笑いしてしまった。

しばらくの間笑い続け、ミイは涙を拭いながら言う。

「あれは別に頭がおかしくなったわけじゃないです。ちよつと……事情があつて……ふ

ふっ」

おばちゃん連中はなんだか釈然としない様子ではあったものの、頷いた。

そして、話を変えることにしようだ。

「そうかい……まあ、大丈夫なら良いよ。しかし、良かったねえ。マリアさんが石化の呪いを受けたと聞いたときは……グスツ」

「本当だよ。正直なところ、バルガスではマリアさんを助けられないんじゃないかって心配していたんだ」

「あの馬鹿も頑張ったんだねえ。今度会ったら優しくしてやろうかねえ」

……バルガスの評価が想像以上に低い。

「お母さんを治してくれたのは、ドロテア様だよ」

俺らがやったとバレたら面倒なことになりそうなので、治療はドロテアさんがやったこととしたのである。

ミイの言葉を聞いて、おばちゃん連中はそれぞれ声を上げる。

「なんだって!? あの英雄・ドロテア様かい！」

「でも確かに、ドロテア様なら簡単に治してくれそうねえ」

「マリアさんは以前、一緒に冒険者をしていたはずだ。そのご縁ってことかいね」

「やはり英雄様は違うねえ」

立ち読みサンプル はここまで

それから、会話は続いた。

世間話やら噂話やら……俺が入れないような話題ばかりだったが。

そして、おばちゃん連中は、何を話していても楽しそうで、元氣いっぱいだ。

どの世界でも、おばちゃんパワーはすごい！

そして、シルはいつの間にか子供達に囲まれてモフられていた。

まあビビが仕切っていたし、食べ物を買ってシルは嬉しそうに尻尾を振っていたから放っておいたけど。

結局、商店街を抜けたのは昼を随分と過ぎてからだだった。

俺達は今、中央広場内に置かれた椅子代わりの大きな石に座っている。

「テンマさん、ジジちゃん、ごめんね。商店街の人達は子供の頃からの知り合いで……」
申し訳なさそうに、ミイが謝ってきた。

俺は顔の前で手を横に振る。

「傍から話を聞いているのも楽しかったし、気にしなくて良いよ。おばちゃん連中の勢いはすごくて驚いたけど、人情味があるっていうか……良い人そうだったね。マリアさんのことをすごく心配しているのも分かったし」

「活気があって、私も楽しかったです。それにしても、バルガスさんの話には笑っちゃい

ました」

ジジは思い出し笑いしながら、そう話した。

「ははは、あの姿を見たら誰だっておかしくなつたと思うよな」

「テンマさん、酷いですよー！ あれをつけるように仕向けたのはテンマさんじゃありませんかー」

そんなふうにするミイの口元はニヤついている。文句を言っているわけではないらしい。「いやいや、俺も冗談半分だったんだよ。それに妻であるマリアさんも勧めていたし、俺だけの責任ってわけでもないはずだ」

それにしても、ミイが言っていた通り、中央広場には様々な屋台がたくさん出ている。食べ物や飲み物だけではなく、服から雑貨まで。あらゆる物を取り扱っているから、見ているだけでも楽しいんだよな。

それに、屋台だけでなく通りを囲むようにして大商会も店を出している。

俺が興味津々に広場を見ているのに気付いたのか、ミイが口を開く。

「中央広場はお金持ちの住宅街や貴族様のお屋敷街も近いんです。そのため、平民だけでなく貴族様やその家族なども来ていらっしやいます。特に周りの大商会には貴族様やお金持ちが来るので、あまり近づかない方が良いでしょう」

確かに屋台には、護衛を付けた金持ちや貴族らしい人達が群がっている。